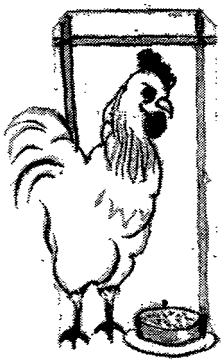

今月のリンゴ園の作業

さていよいよ四月になつた。雪どけの早い東北地方は、すつかり雪もとけ、第一回の機械油撒布も始つたことと思う。また本道でも道南地方は、雪もとけて黒々とした地肌が見えていることと思う。道中央部から北の方でも十日も過ぎれば雪もなくなつてくる。剪定枝の取片付けの終らぬ方は雪のとけぬ中に整理することだ。また今月は、りんご園の改植新植の適期でもあるから、適期を失わせぬ内に苗木の定植を行うことだ。今月は苗木の定植を中心に筆を運ぶこととする。

苗木を植える時に一番最初にしなければならないのは植穴の準備である。植えた苗木が良く発育するためには根が深く土中に入らなければならない。このためには土壌を深く耕すことである。特に下層土が固い磐のあるところ等は、下層土を十分に打砕くことである。植穴の大きさは、幅六尺、深さ三〜四尺は、最低必要といわれている。しかし原野等で本年始めて植えつけるところでは、全面的に耕起することは労力的に見て不可能である。それ故初年目は植穴を十分に念を入れて掘つて、苗木を植え付け、その後漸次周囲を深耕していく方が得策であろう。植穴を掘つたらその中に刈柴とか、剪定枝藁稈類等の粗大有機物や良く腐熟した堆肥を五十〜六十貫土と良く混和しながら入れる。穴を埋めた当時水平にならした程度では、後で陥没するので、中高に盛上つた位が丁度良い。植穴を掘る時期は、本来ならばたとえ春先に苗木を植えるとしても秋に準備すべきであるが、止むを得ず春に植穴を掘る時は、苗木の定植の少なくも、一〜二週間前には掘るべきだ。このことはすべての果樹にあてはまることである。次に反当栽植本数だが、最近では従来の経験から見て粗植大木主義になりつつある。今までは四間×四間反当十八〜二十二本といわれて来たが、現在木の整枝法も変り、反当十〜十二本という風になつて来た。しかし初めからこのように粗植すると初期の反当収量が上らないから寧ろ二間半もしくは三間植えとし、枝条が隣の樹と交錯するようになつた頃、ちゆうちよすることなく間伐すべきである。

次に品種についてであるが、りんごは他花授精を必要とするものである。他花授精でないと授精が悪くしかも種子の出来が悪いため落果も多くなり果形も悪くなる。モニリヤ病の防除のためにも完全授精が望ましい。このために混植する必要がある。今授粉品種との関係を二、三例を上げると次のようになる。

主体品種	授粉品種
紅魁	黄魁
祝	旭、紅玉、デリシャス
旭	祝、紅玉
紅玉	祝、旭、ゴールデンデリシャス

以上は二、三の例にすぎないが、植付けたい品種に対しこれらの品種を若干入れることが大切だ。近年青森県における国光単植園は、非常に問題が大きくなつている故、植付け当初に十分計画をねつて植えるべきだ。次に栽植すべき品種であるが良く自己の園の環境に留意して決定すべきである。

次に苗木の取扱いについて述べよう。苗木は到着したら直ちに荷をほどき、一隅に固めて仮植することだ。時に遠方から来た場合は、なにはさておいても、荷をほどくことが大切である。春先は何度もいうように乾燥しやすいので、切角優良な苗木を入手しても、植付までの管理如何によつては、失敗することは当然である。また植付け二、三日前に根を水に浸け十分吸水させておくと大変活着が良いから是非実行をおすすめいたしたい。次に苗木を植える前に根を良く調べ根頭癌腫病があるかないか、また紋羽病がついているかどうかを見ることである。もしも疑わしい時は、惜しむことなく焼却すべきである。たとえ病気がついてなくとも、念のために石灰乳液（水一斗に対し石灰一貫）に十分間位根を浸漬することが良い。

次に根群の調整であるが、太い根は貯蔵根でもあるから長目に残し、細根は短目に剪除することである。次に地上部の処理であるが、苗木の掘り取り等で根が切れて地上部と地下部の釣合がとれていないし、また将来の主枝構成の点から見ても不都合であり、良い主枝候補枝を出すためにも、地上二尺五寸〜三尺位の所で切返すことだ。そうして苗木の根を無理せぬように十分伸ばして良く土と密着させて植え込む。その深さは接目が地表とすれすれになる位が良い。余り深植することはよくない。

次に使用する苗木の砧木は、マルバ砧だととかく高接病等が出て問題が起りやすいのでなるべくならば三葉海棠砧もしくは共砧の苗木を使用することをおすすめする。

最後に植付け後の管理であるがとかく果実のならぬ内は、管理は忘り勝ちである。このため苦心して植えた苗木も切角実の結ぶ時期に至つておりながら、さつぱりなくなつていることは、往々聞かれることである。植付けが終つたら、早速支柱を立てて木の動揺を防ぎ、また周囲に敷藁をして乾燥を防ぐことを忘れてはならない。次に肥料であるが、植付時に施肥を控目にし芽が出てから硫安等の窒素質肥料を追肥として分施することである。植付時濃厚な肥料を根に直接にふれるように施して活着しなかつた例は幾多あることで、心にとめておかねばならない。間作する場合は、すくなくとも苗木より三〜四尺位離して行うことである。

以上簡単に述べたがまだまだ足りない点もあるが更に機会を見て詳しく述べることとする。なお本年は青森地方では、モニリヤ多発の予想が出ているので、草生園以外では早目に耕起し土壌を乾燥させるとともに硝石灰の撒布を実施することであり、草生園も硝石灰の撒布を行うことを忘れてはならない。